

アメリカの奴、ひどい事する



南洋の雪

日記 ①

1月15日 投縄時に近頃話題に
出さなかった女の話が出て大いに
花を咲かした
1日1ページ。「仕事が終わった
後、こんまい部屋で」たわいの
ないやりとりを書き残した。船に
揺られ、狭い寝床で横になってし
たためたため、いささか文字が乱
れている。

山中は29（昭和4）年、土佐清
水市に生まれた。父は漁師だった

が、山中は一時、神戸の工場で働
き、青年学級に通った。

青年学級は、働く青年たちを対
象に、仕事や生活に必要な知識や
技術を教えていた。山中はそこで
日記を書くことも勧められた。

日記をつけ始めたのは19歳の7
月だった。愚直に言いつけを守り、
船乗りになった後も習慣は途切れ
ることがなかった。70歳を過ぎる
まで半世紀以上、それは続いた。

山中が乗り込んだ第五海福丸は
54年の元日に沖へ向かい、翌2月
7日に帰国。神奈川の浦賀に滞在
し、21日、太平洋のミッドウェー
諸島を目指した。

3月1日 沖へ 原爆実験（マ
ーシャルニテ）
山中はこのころ、体調がすぐれ
なかった。

3月3日 腹の具合が悪く成っ
て来た様だ

3月4日 昨日より腹の調子が
悪く、便所に2回もいった。やり
切れない

3月5日 ねるより他に体の置
場がなく、體も痛い、頭も痛い、

腹も痛い。良い所がない

3月6日 大丸がマーシャルで
大漁だとの事。針路変更
体調は8日によろやく回復し、

「今朝より飯を食う」と書き残し
ている。船は11日にマーシャル諸
島付近に着く。

海上保安庁が残した資料では、
12日から操業が始まった。山中の
日記では13日。ページの端には
「目鉢大1小2 キハタ小2」な
どマグロの種類や漁獲量が記録
されている。第五海福丸はこの
時、ピキニ環礁から1千⁺あまり
東にいた。

そのころ、日本では第五福竜丸
が静岡の焼津港に帰港したところ
だった。福竜丸は1日、ピキニか
ら東に約160⁺離れた公海上で
米国の水爆実験に巻き込まれてい
た。

それを聞きつけた読売新聞の記
者が特報した。読売新聞は3月16
日付朝刊で「邦人漁夫、ピキニ原
爆実験に遭遇」焼けた⁺れた顔」
「水爆か」の見出しで報じる。

日本中が騒然となる中、山中も
洋上で事態をほぼ正確に把握して
いた。

3月19日 此の附近原子病が流
行との事。政府より海水持参せよ
との事らしい。アメリカの奴、ひ
どい事をするものだ

（西村奈緒美）



3月19日の日記には「此の附近
原子病が流行」と書かれている

日記を記したのは山中武。当時
は24歳で、室戸の第五海福丸の操
機長だった。エンジンニアの長だ
が、甲板に出て投縄や揚げ縄を手
伝うこともあった。

日記には機関室での出来事や海
の様子、船の位置や漁獲量などが
つづられている。とはいえ、仕事
の内容ばかり書いていたわけでは
ない。

1月12日 岩ちゃんとカシキの
親父と喧嘩す

岡は大変な事に成って居る



日記 ②

山中武の日記は米国の水爆実験に関する記述が続く。

3月20日 今日の無線よりの二
 一ス(原文ママ) 陸ではN20、
 E175より沖の漁場は原子の為
 原子病あり。水揚禁止との報を聞
 きた(原文ママ) 我々は其の附
 近にあり多に心痛める
 N20は北緯20度、E175は東
 経175度。マーシャル諸島ピキ
 ニ環礁の北東約1400⁺にあた
 る。

3月22日 一生懸命働いても此
 の魚が売れるか売れないか、いづ
 れるくな事ではない。アメサンが
 原始爆弾の實研(原文ママ)をや
 り、附近一〇〇〇哩は放射反応に
 て原始(原文ママ)病に成り。或
 る船にては人命を捨てたとの事

3月23日 今日の無線では岡で
 は大変な事に成って居るそう
 な。

第1水揚禁止。今だ(原文ママ)
 2週間も売れず、入港地も指定さ
 れて居る船があるそうだ

日本では水揚げされたマグロが
 次々と捨てられていた。市場の一
 角に掘られた穴に埋められたもの
 もあれば、沖で投棄されたものも
 あった。

第五福竜丸の被曝を受け、国は
 ビキニを取り囲む広い海域を「指
 定要報告区域」に定めた。この範
 囲内で操業した漁船、通過した漁
 船は、国が指定した5港で放射能
 検査を受けるよう通知された。こ
 うして、一定以上の放射線が計測

されたマグロは廃棄された。

3月26日 原子爆弾の件、病氣
 に成ったものすべて米政府より
 補助して呉れるそう

後に日米政府は、米国が見舞金
 200万ドル、当時の円換算で7億
 2千万円を支払うことで政治決着
 を図る。

山中はこの日、第五海福丸がピ
 キニ東側の海域で操業を終えたこ
 とも記す。マグロなど8500
 貫、32トほどを積み、神奈川の浦
 賀へと船を走らせた。

米国は27日にピキニ環礁で2回
 目の水爆実験を行った。海上保安
 庁の航路図では、第五海福丸は28

30日、危険区域を横切るように
 航行している。

米国は福竜丸の被曝後、実験前
 から設けていた「危険区域」を半
 径450⁺呎(約830⁺ポ)の扇状
 に再設定し、広さは当初の8倍に
 なった。山中たち乗組員は危険区
 域の拡大を知らなかったのか、今
 となつては定かではない。

いずれにせよ、山中が2回目の
 実験に気付いた様子はなかった。
 27日の日記は、エンジンの調子が
 悪いことや、起こしても起きない
 仲間に腹を立てたことだけを書き
 残している。その後は帰国へとは
 やる気持ちがつづられていく。

4月6日 追風強く船足良く延
 びる。此の調子なれば予定よりか
 早く入港するだろう。愈々煙草も
 残り20本と成った

4月7日 山が見え富士山の雄
 姿がはっきりと。懐かしさを増す
 しかし、郷愁にかられたのもつ
 かの間のことだった。浦賀に入港
 するやいなや、東京へと向かうこ
 とになった。国が指定した5港の
 一つだ。

この日の午後6時に到着。厚生
 省(現厚生労働省)の検査員が待ち
 構えていて、山中たちの所持品の
 放射能検査を始めた。 敬称略

(西村奈緒美)



1954年3月17日、東京の築地
 では、ピキニの核実験で汚染
 された魚を土中に埋めた

明日は魚を捨てに沖に向う



日記 ③

多くさん(原文ママ)の見学者だった。新聞記者達が多くなるさくてやれん。夕方頃厚生省からの使者が来て水揚禁止。ハッチに封印をした。在中の魚に放射反応ありとみなした。明日は魚を捨てに又沖に向う事だろう

翌日、米国があらためて魚を調べ、厚生省とは正反対の判断を下す。

4月9日 アメリカ側より検査に来て、放射熊(原文ママ)の出た魚を調べた。結果は良いそうである。食ってもさしつかいがないと云って居る

朝日新聞は3月29日付朝刊で、米国の原子力委員会が「この実験水域外の太平洋でとれた魚はたとえ危険性があつたとしてもほとんどとるに足らない」と声明を出した、と伝えている。

一方で、原子力委員会衛生安全局長が輸出用冷凍マグロの精密検査を日本の検査官に命じたとも報じた。

結局、魚を捨てることになった。夜の11時ごろ、水産庁と厚生省の職員を乗せて第五海福丸は沖へ向かった。

4月10日 水産聴(原文ママ)から来たのが貫々を一本一本見ると云うのである。期定(原文ママ)の180哩迄達しないが厚生省より来たる検査員が船酔いで丘に帰りたいそうだと云う。

ので話合いの結果、100哩の所で挑魚す(逃魚か。原文ママ)4時より始めた。2000貫たらずを貫数3000貫強にし、2時間余りかかった

第五海福丸は11日、神奈川の浦

賀にいったん戻った。その翌日、山中はシャツ2、3枚を洗濯し、ジャンパーと作業シャツは捨てた。母港の室戸を目指し、13日に帰港した。厚生省は各都道府県にも自主的な検査を求めている。

4月13日 室戸にてもガイガ(放射線測定器)にて放射熊(原文ママ)を調べられる

4月14日 縄の整理を手傳う。放射熊(原文ママ)があるので室戸の川にて洗い流し附近に干す

山中は室戸で映画を見たり、友だちと酒を飲んだりして過ごした。消閑の日々を過ごした後、実家がある土佐清水市へ向かった。

4月18日 多くの人に笑顔で迎へられ嬉しく思った。隣りあたり皆集まりて色々沖の模様なり聞き、くやみの種をもらす。土産とてなく、母に14000円、祖母に4000円、春おばさん等いづれも10000円づづ土産変り(原文ママ)に置く

歯を治療して、見合いもした。10日後、故郷を後にして、高知市種崎のドックにおもむいた。船の修理が済むと今度はカツオ漁に繰り出した。

5月23日 出港と云う言葉は實に淋しいもので、又縄事業(マグロはえ縄漁)の出港はどこか地極(原文ママ)へでもいく様な感じで見送り人のないもの程淋しい事はないが、鯉業の出港は何となく軽い気持である

|| 敬称略 (西村奈緒美)

水素爆弾放射反応があるか無いかを厚生省より検査員が来て調べる。其の結果、江口さんのテブクロ1200、奥村のシャツに700カウント、自分の作業服に300カウントあった

4月8日 今朝揚げた魚に3、4匹反応ありた(原文ママ) サ

ンマ、カジキ20本ばかり300カラ1500カウント出るので船に置き再三調べる。調べたる結果はついに不良なる



1954年4月8日、第五海福丸はマグロの入った木箱が封印された

日記をつけるけん覚えちゆう



日記 ④

山中武を乗せた第五福福丸は、短い操業を繰り返す夏のカツオ漁を終え、1954年10月から再びマグロ漁を開始した。漁場はミッドウェー周辺。いったん日本に戻り、55年2月からはビキニ海域に移った。

この出港前、山中は医師に結核の兆候があると告げられている。5月に下船、8月に結核と診断され、1年ばかり治療に専念した。59年5月、山中は第五福福丸を降り、別の船でビキニの東1千キロの海域で操業した。その後は鳥取でイカ釣り漁船に乗り、70歳で引退した。

山中は土佐清水市の自宅に妻と暮らしている。37歳の時に建てたもので、漁師町の狭い路地をくねくねと上ったところにある。

ビキニ周辺海域にいた船員の聞

き取り調査を行っていた高校教諭の山下正寿は早期退職し、その後も聞き取りを続けていた。2010年11月、室戸市の調査で山中のことを伝え聞いた。

土佐清水の自宅を訪ねると、山中はせきを切ったように話し出した。船の航路や放射能検査の結果、廃棄した魚の数をすらすらと口にした。

「日記をつけるけん、覚えちゆう」

何げないその一言を山下は聞き

逃さなかった。

「その日記、今もありますか」

「あるよ。段ボールにしまってる。何十冊もある」

山下はそれまで、船長の日記は目にしたことがあった。ノートには針路や風力、水温などが記されていた。次の操業のための事務的な内容だ。

山中の日記は違った。乗組員の立場から日々の出来事や感じたことを率直につづっていた。日記を借りて一気に読んだ。

「ビキニ事件は主に第五福福丸を通じて語られてきた。だが、この日記には福龍丸がマーシャル海域を離れた後の漁船の様子が書かれている。無線を通じて事件を知りながらも操業は続けられていた。福龍丸だけが被災船ではなかったことを裏付けている」。それが山下の評価だ。

山下は自宅を足しげく訪ね、当時の様子を詳しく聞いた。山中は終始笑顔で応じ、話はどれも生々しかった。

日記の存在は山下を通じて高知の記者たちに伝えられ、新聞各紙が報じることになった。朝日新聞

も11年3月2日付高知版で「船員日記『死の灰』克明」の見出しで記事を掲載した。

15年10月、山下は久しぶりに山の自宅を訪ねた。

「元気でやっとなかね」。耳が遠くなった山中に大きな声であいさつし、玄関に出てきた妻にも頭を下げる。「いつもお邪魔してすみません」

この日の目的は、県が翌月に土佐清水市で開く健康相談会の案内文を手渡すことだった。相談会で講演する専門家に山中を会わせようと思っていた。

「当時の様子をもう一度話してもらえんやろか」

山中はうなずいた。

「原爆ほど怖いものはない。ほかの爆弾より怖い。海から魚が死ぬ」。原爆なのか、水爆なのかすらはつきりしなかった1954年3月。80半ばを過ぎた山中の口ぶりはそのころに戻ったかのようだった。山中はビキニ被曝国家賠償請求訴訟の原告団に加わることになる。

日記は東京都立第五福福丸展示館が保存と展示を検討している。

◇ 敬称略（西村奈緒美）

南洋の雪「日記」は今回で終わります。次回は「灰」の予定です。随時掲載します。



山中武は語る。「実験の影響はわからなかった。年をとってからじっと考え」と思い出す。わかった今は怖いで